

各関係機関長 様

佐賀県農業技術防除センター 所長

イチゴのハダニ類の防除は冬季に徹底しましょう

本年は、イチゴのハダニ類が本圃定植直後から多発生で推移しています。多発生圃場では、増殖が盛んとなる春先にかけて、株の生育抑制や果実の品質低下等の被害を及ぼす恐れがあります。

今後の被害を防止するためには、増殖が遅くなる冬季の防除が重要です。については、下記事項を参考にして、防除対策を徹底してください。

記

1. 県内での発生状況

- 1) 本年12月中旬のイチゴの巡回調査では、ハダニ類の寄生株率は16.7%（平年8.9%、前年1.7%）であり、平年よりやや多く前年より多い（図1）。
- 2) 本年は本圃定植後から多発生傾向が続いている。
- 3) 現在、発生が見られる圃場においては、春先に多発生する恐れがある。

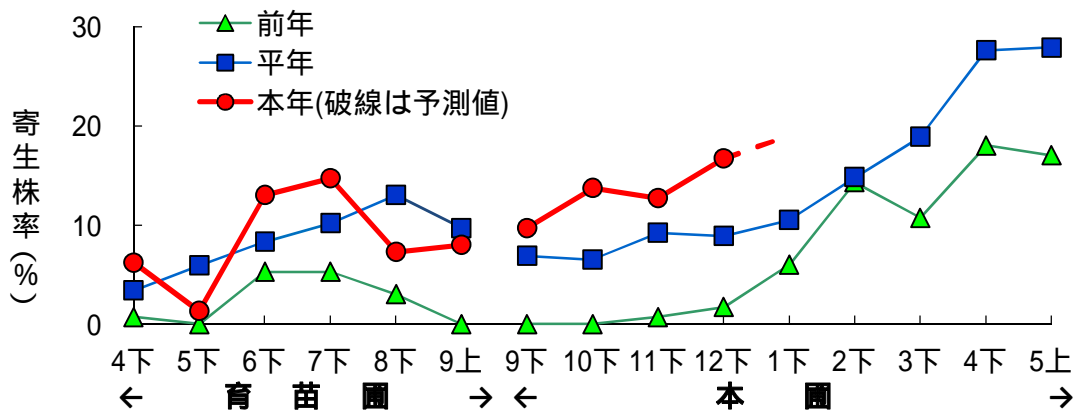


図1 イチゴハダニ類の寄生株率の推移

2. 防除対策

1) 薬剤防除

- (1) 増殖が遅い冬季に防除を徹底する。
- (2) 葉裏や下葉まで丁寧に観察し、早期発見に努める。特に、草丈が低くなっている箇所等を注意深く観察し、萎縮した株やくもの巣状の糸で覆われた株が見られる圃場では、早急に防除を実施する。
- (3) 多発生圃場では、5~7日間隔で複数回連続して薬剤防除を実施する。
- (4) 薬剤は下位葉等を除去した後に散布する。

(5)ハダニ類は薬剤がかかりにくい葉裏や下位葉に寄生していることが多いので、葉裏や下位葉にも薬剤がかかるよう、十分量を丁寧に散布する。

(6)農薬の選定にあたっては、天敵やミツバチへの影響を十分考慮する。

2) 薬剤抵抗性対策

(1)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、系統の異なる薬剤のローテーション散布を行う(県病害虫防除のてびきP199-200参照)。なお、薬剤防除の際は使用時期及び使用回数等の使用基準を厳守する。

(2)農業試験研究センターが平成26年に実施した薬剤感受性検定試験の結果、圃場によってはダニサラバフロアブル、マイトコーネフロアブルに対する感受性が低下している個体群が確認されているので、防除の際の参考とする(表1参照)。

(3)薬剤散布後も発生状況を確認し、防除効果の低下がみられる薬剤の使用は控える。

(4)抵抗性発現の可能性が低い気門封鎖系薬剤(粘着くん液剤等)や天敵を活用し、総合的な防除を行う。

表1 県内各地のイチゴほ場で採集したナミハダニの各種殺ダニ剤に対する感受性^{a)} (佐賀県農業試験研究センター,平成26年)

採集場所	採集時期	圃場	各剤(希釈倍数)による補正死亡率(%)								水浸漬による生存率(%)
			スターマイトFL		コロマイトWP		ダニサラバFL		マイトコーネFL		
			2000倍	6000倍	2000倍	6000倍	1000倍	3000倍	1000倍	3000倍	
A	5/30	本圃	100	100	100	100	100	100	100	84	93.6
B	5/30	本圃	100	100	100	100	100	100	100	45	97.1
C	6/3	本圃	99	94	85	92	12	0.4	26	22	98.6
D	6/3	本圃	100	100	100	100	100	100	100	98	100
E	7/7	本圃	100	100	-	-	100	100	75	67	98.9
F	9/22	育苗床	97	96	-	-	2	8	-	76	93.5
G	9/22	育苗床	100	100	100	34	95	90	100	96	95.6
H	9/9	育苗床	99	100	100	84	79	37	100	90	93.2
平成18年の結果	5~6月	全て本圃	-	-	93~100	95~100	100	100	100	98~100	

a)FL:フロアブル、WP:水和剤、希釈倍数:常用濃度、常用濃度の1/3希釈薬液(以下、1/3濃度)

-:検定未実施